



# 「感謝」研究の必要性

道德科学研究センター副センター長  
廣池千九郎研究室室長

みやした かずひろ  
宮下和夫



「感謝」という言葉は、私たちが日常的に用いている言葉であり、また、モラロジーにおける「伝統」や「報恩」といった言葉とも密接に関わり合うものでもあります。私は自分の専門領域として、いわゆる「世界の四聖人」の一人・孔子に源流を持つ儒教(儒学)の思想について研究をしています。儒教の領域では「感謝」に関わる事柄は「忠」や「孝」という言葉で「間接的」に語られてきました。なぜ「間接的」というのかと言うと、「忠」や「孝」に伴う「ありがたいことだな」と思う感覚や、「ありがたいことだな」と感じさせる背景そのものについては、儒教ではあまり語

られることがないように思えるからです。仏教では「恩」について知ること(知恩)や感ずること・報いること(感恩・報恩)を繰り返して語ってきたのに対して、儒教ではその部分をあまり語らないように見えるのです。そのためなのでしょう。現代においては「忠」や「孝」という言葉は、なかなか理解も共感もしづらいものになりつつあります。そこで、今一度、私たちが日頃から用いている「感謝」を軸にして、私たちの文化が育んできた「感謝」を検討・分析し、「感謝」の内実を描き出せないかということを考えています。

現在、心理学における感謝の研究が非常に勢いで進んできています。とりわけ、日本人の感謝感情には、欧米諸国と比較して「申し訳ない」とか「すまない」という感情が伴っていて、そのことが日本的(もしかすると東アジア的)な「感謝」の文化であることに注目が集まってきています。しかし、一般的に行われている研究では、特定の人物に対する感謝が中心となっており、また、普通の人々が抱く感謝を中心に取り扱っています。ここにモラロジーならではの研究との接点があります。

モラロジーは、「オーソリノン(伝統)」という切り口を通じて「感謝」を考え直す学びであると私は常々感じています。モラロジーで考える「感謝」は、特定の現存する人物だけを対象にしたものではなく、もっと大きな広がりを持つものです。更には「嬉しい出来事」にだけ感謝するのではなく、むしろ「つらい出来事」や「試練」に対しても感謝できるかどうかを考えるような世界でもあります。

このような視点を持ちながら感謝を研究していくことで、これからの時代の道徳を考えていく何らかの手がかりが得られるのではないかと期待をしています。